

深夜の二時過ぎ？ いや、早朝の三時前と言ったほうがよいかもしれない。枕元のケイタイが「ラララ・ランララ ラララ・ランララ」と突然鳴り出した。一瞬目覚まし時計と思い手を伸ばす。いや音が違う。ん？ ケイタイか？ 眠りかけた脳が七十パーセントほど現世に戻った。誰だろう？ オフフックに困惑しない、こんな時はいつも何も疑うことなく不吉な予感を感じながら即座に電話をとる性格である。「あなた、まだ起きてる……寝れないでしょう？」

ん？ 女の声だ！ こんな夜中に珍しい。次の瞬間床一つ隔てた階下で洋画を観ていたはずの妻だと確信した。

彼女の好きなジャンルはグレースアナトミーやデスパレートな妻、私とは少し違う趣向のため、ドラマが始まると私は「おやすみ！ とばかり布団にもぐり、スタンドを点けて読書やまだ良く読んでいなかったその日の新聞に目を通す。でも、その内ウトウトと気を失ってしまう。次世に行く時はこんな感じかも。それにしても無線通信のパーソナル化は進んだものだと思えてビックリする。昔アラブに仕事で行っていた時、超豪華な自家用車に金メッキされた自動車電話が二台搭載されており、前後の座席で通話しているのを見て、何てことだとあきれ顔で笑ったことがあった。あの頃はまだケータイは無かった。あれから約二十五年、僅か数メートル隔てた階下の妻とケータイで話す自分に思わず苦笑してしまった。

新聞記事によると、小六の二十五パーセント、中二の四十六パーセント、高二の九十六パーセントがケータイを持っており、中二の二割は一日五十以上もメールをするらしい。高二の二割は食事中、入浴中、授業中にもカチャカチャやっているとのことである。これは問題だ！ と叫ばずには居れない。

無線電波を使って友情を確かめ合っている、返信がないと嫌われたのかと心配、メールをしていないと嫌われるのではと心配する。やはりこれはデジタル人間かも。細かい感情や感性、人への本当の優しさの心が危うくなるかもしれない。私も妻や娘とたまにメールするが確かに便利である。この便利さと危うさを併せ持つケータイのメール機能は、核拡散に頭を悩ましている世界に似ているようだ。

それにしても意思疎通は薄い床越しの僅か数メートルだが、妻からの電波は数百メートル離れた無線基地局まで飛んで行き、多重化されたTDM A信号は更に遠方の移动通信制御局まで光ファイバーの中を突っ走り、中継交換機を経てホームメモリーで私のケータイが何処にいるかを確認し、音声かデータかを識別、端末の認証(間違つてつないだり不正な携帯に接続許可しない)、暗号化(盗聴防止)、私が属している交換機への接続、通信チャンネルの指定などを一

瞬にしておこなっている、それも真夜中に。システムと機器は二十四時間フル稼働だ、支えている人間もフル稼働、心から「苦労様と言いたい。

74・不思議な体験 (2009.4)

実にのどかな桜陽気の日、MM21（みなとみらい21）の汽車道あたりの散策を思い立ち妻と出掛けた。家から車で十五分程のワールドポーターズの駐車場に車を置き、歩いたり食べたり飲んだり、途中若者の大道芸が実に素晴らしいので思わず千円を奮発してしまった。駐車場代は上限千円だったので何か得した感じ、今年の桜見物も大満足である。

帰り道、妻は少し疲れたらしく助手席を少し倒し眼をつむっていたが、暫くして座席を起こすや否や叫んだ「あなた！ 前の車を見て！ 2525よ！ すごい！」私は何のことか困惑しきり？ でもハンドル捌きには影響なし。

妻の説明が始まった。「三区の内藤さんの車、ナンバーは1188でしょう。いつまでもよいパパであるよう、買う時に番号を申請したんだって。だから、もし内が今度車を買う時は2525（何時もにここ）がいいかな、と今眼をつむって考えていたのよ。そしたら見て前の車、2525だよ！」

「おまえさ、先に前の車を見て、そんなこと言ってんだらう？ 当然私は信じられないと言う疑念でいっぱいであった。

その後、妻の力説に負け「こんなことってあるんだ！ と百パーセント信じる結果になったが、これはまさに以前テレビ番組で観た「世にも不思議な物語」そのものだ。

妻には何か特殊な能力があるのかもしれない。もしかして、私のことを見抜いているのかも……。

75・2009WBC (2009.4)

今年も私の好きなメジャーリーグ（MLB）が始まった。胃潰瘍とかで開幕八戦を休場したイチローが復帰初日またまたやってくれた。

安打本の日本記録を持つ張本勲氏の観戦している目の前で三千八十五本目を、しかも満塁ホームラン、実にドラマチックである。翌日も張本氏の前で三千八十六本目を快打、張本氏も思わずガッツポーズ、この日を待っていたとのことである。

「張本さんが見ていた景色がどんなものか、頂に立った景色がどんなものか感じたかった。今日登ったが、すごく晴れやかでいい景色だった」

「胃潰瘍と漢字で書くときと重たく感じるので、イカイヨーと書いてくださいね」いつもの明るいイチローが戻ってきた。

数週間前の激闘WBCを思い出す。三十八打数八安打、二割チョットと不調にあえいだチームリーダ、イチローの神妙なコメントはこうだ。

「想像できない苦しみ、つらさ、そして痛覚では感じられない痛さを感じた」
リーダーの自分がほとんど勝利に貢献できない中で仲間が活躍している。彼の孤独感、苦しみが良く分かるような気がする。

そして、ついに宿敵韓国との決勝戦となった。勝利目前の九回裏に追いつかれて三対三で延長戦に突入、声を失った日本ファンと歓喜の韓国ファン。まさにWBCの最終戦にふさわしいと言える場面だ。

十回表二アウト、走者二、三塁、偶然か必然か打者イチローにまわって来た。韓国は打てなかった不調イチローに真っ向勝負を挑んだ。メジャーリーグでも似たような場面ではイチローは敬遠されている。次の瞬間、まるでフィクショナルドラマのように場内外で応援する両国のファンが歓声と悲鳴を上げた。

イチローがセンター前に二点タイムリーを快打し、韓国を突き放したのである。結局五対三の勝利となった。

「僕は持っていますね。神が降りてきました」「美味いところだけを頂きました、ご馳走様です」 最後にやはりスポットを浴びたイチローらしい粋なコメントだと思う。

そして試合後の若い選手のコメントも忘れられない。

「イチローさんが打てないから日本が負けたと言われたくない。イチローさんばかりに頼っていてはいけない、僕らが引っ張らないと、と思った」

そして、その言葉どおりぐいぐい引っ張ったの決勝ドラマであった。

76・最近の印象的フレーズ (2009.6)

●1941年十二月八日、日本が真珠湾に航空攻撃を加え米英に宣戦布告、資料によるとアメリカの死者約二千四百、重傷者約千八十。日本側も約七十人の死者だったとのことである。これが地球規模の戦争へと拡大したいわゆる第二次世界大戦の一端です。

そして1945年八月、広島、長崎に原爆が落とされ終戦となりました。今までテレビのドキュメント番組などで観る限りアメリカの立場は「原爆投下は戦争終結に役立った。原爆投下が無かつたらもっと多くの犠牲が発生していた」と言うのが多かったように思います。これらについては議論百出であるが、それはそれとして敗戦の色が濃厚な一年前に日本は自ら終戦になぜ軟着陸出来なかったのか？ 当時の国のリーダーに今更ながら問いたくなる。戦争を始める勇氣と勢いはあったが、撤退する勇氣と決断が出来なかったということか。

先日、「平和のための戦争展イン横浜」に行き焼け野原になった横浜市街地の写真を見てきたが、悲惨なものであった。昭和二十年五月二十九日、B29編隊の五百十七機が朝の九時過ぎに横浜上空に達し、約一時間の間に四十四万個弱の大

量爆弾を投下。死者三千六百八十人、重軽傷者一万百九十三人、行方不明三百九人という戦災をまねいた。

その後も日本各地で空襲に怯えながら、勝つまでは欲しがりませんと竹やりでかかしを突く訓練をさせられ、そしてあの原子爆弾が投下された。広島長崎で約二十万人が犠牲になった。今でも二十五万人が身体と心に後遺症を抱えて生活しているという。あの戦災で内地の一般市民が約五十万人命を落としているのとだが、もし一年前に決断していれば多くの命が助かったはずだ。

オバマ大統領が演説しました。

「核兵器を使用した唯一の核兵器国として、アメリカには行動する道徳的義務がある」と、歴代大統領は原爆投下正当論を言っていたが、オバマ時代になりようやく真に核軍縮、核廃絶の兆しが少し見えてきた。と心から思いたい。

●日本に「失われた十年」という時代があったが、それ程昔ではない。あの時は欧米の各国、知識人から日本の対応が遅いと相当酷評され、日本は自信喪失した感もあった。ノーベル経済学賞を受賞した米プリンストン大学のポール・クルーマン教授が外国人記者の会見で言った。

「米経済の現状は、日本の失われた十年のほうがまだましで、かつて日本の対応を批判していたが同じような状況に直面すると、我々も同じことをしている」

さらに、「我々は日本に謝らなければならない」とまで言い放ったが、さすがノーベル賞を貰うほどの人は違う、素直な心とそれをはっきり言う態度に敬服。見習いたいものである。

●国会中継が好きでよく観るがイラ付くことがおおい。それは、質問と回答が組み合っていない為だ。ほんとに知りたいと思っていること、また実にいい提案をしているのに何かハッキリしない答弁で、いたずらに議論を複雑にしているからである。

そうゆう態度やシステムに愛想が尽きたのかどうか知らぬが、大臣までやった渡辺喜美議員が一月に自民党を遂に離党した。行政改革と定額一時金がらみである。

はつきり言って驚き、また痛快だった。

「百年に一度の未曾有の大災害、まさしく百年に一度の政治体制を作らなければダメ、危機管理内閣を作らなければならない。ほんとに危機認識があるのですか？と言いたい！ 官僚から国民に政治を奪還、それが国民運動だ」

「当たり前前のごとを国家国民のために当たり前前にやろう、私は信念を曲げることなく正しい道を行く」

自民党の中枢にいてこれだけハッキリものを言い行動することに敬意を払いた

い。
「おくりびと」がアカデミー賞を受賞したが、俳優の本木雅弘氏が愛読したという「納棺夫日記」に気に入ったフレーズがあった。

人間の行為の中で、宗教を振りかざして戦争をするほど愚かな悲しいことはな

い。心理は一つであるはずだ。こんな釈迦の言葉がある。

「ある人がこれこそ真実である、真如であるというものを、他の人は虚偽である、虚妄であるという。このような人々は異なる解釈にこだわって論争する。なぜ、修行者達は同一のことを語らないのか、まことに真実の一つであって、第二の真実というものはない。だからその真実を知ったものは争わない」（スッパニパータ（原始仏典）中村元訳）

議論ばかりして税金の無駄使いをしないで、国家国民のために良い政策は直ぐにやればいいだろう！ と言いたくなる。

●「審議の中では委員の質問に真摯に正面からお答えを。論点をずらした答弁の場合、再び答弁をお願いする」「あいまいな答弁は許しません！」

衆院外務委員長 河野太郎氏が外務省局長の答弁に対し、直ぐに「速記をとめてください」と言った。審議が中断するのは、普通は野党の抗議の場合であるが、委員長自ら局長を呼んで、具体的答弁を求めたのである。さらに「今までは政府がろくに答弁もしないで、そのまま流されていた。与野党の意見が対立するのは仕方がないが、国会での議論はあやふやな部分をただし、問題点を明確にするためである」と言い放った。実に痛快である。

思うにこのように痛快な議員は他にもいっぱい居るのであるが、分かっているにもかかわらずシステムの枠にあり、黙っているのだろう。

河野氏のような議員が多く居ないと日本の未来はないかもしれない。

●哲学者「木田元」八十歳）氏のフレーズ

「僕は短期間に語学を勉強する力をつけたので、初めてのドイツ語も同じように勉強した。一日十時間以上、二週間で文法を終え、文章を読みました」

「哲学の勉強にはギリシャ語とラテン語を学んでおかないといけない。大学二年でギリシャ語、三年でラテン語。大学院でフランス語を修めました。

四月から六月を習得期間と定めて、一日八時間は勉強しましたね。語学は短期集中です。その後、本を一冊読むと身につく。

一日も休んではいけません。テレビもなく金がないから酒も飲めず、勉強するしかないからできたのかもしれない。楽しみは夜中にかじるコッペパンと映画をみることでした」

ウーンなるほどスゴイ！ 自分の勉強の仕方は間違っていたかもしれない。あるいは考えが甘かったのかもしれない。この歳になり今更何かにチャレンジしようか、やめようか、どうしようか？ 迷っている時点で既にダメなのかも。

●麻生総理が過去三回の総裁選で麻生氏の選挙対策本部長を勤めた「太郎会」の会長、盟友の鳩山総務大臣に事実上のくび（更迭）を言い渡した。

その時の鳩山フレーズ、

「今の政治は正しいことを言っても認められないことがある。自分もいっぱい失敗してきた人間だが、汚れたことをやる人間は許せない……」

麻生太郎と言う政治家を信頼して、総理にしてやろうと思ってやってきた。今回の総理の判断は間違っていると思うが、今後は正しい判断で政治をやっていたことを信じている」

「首相との一回目の会談で、西川さんが私に頭を下げると言う話もあったが、西川さんが謝罪すべきは国民に対してであって、私に対してではない。私はその妥協案を一切拒否した」

自分の正義感、信念、信条を貫く痛快なフレーズだと思う。